

〈論文〉

## 山頭火

——俳句にみる生と死の表現——

福田 周

### はじめに

大正・昭和前期の俳人である種田山頭火（以下、山頭火）は、5・7・5と  
いった俳句の定型や季題を排除した自由律の代表的俳人として知られる。彼  
は出家した後に、托鉢しながら放浪の旅を繰り返し、また酒に溺れて数々の  
トラブルを引き起こすなど、一風変わった人生を歩んだ人物である。

ここでは、自然と自己とが一体となった俳句を生んだ山頭火が、なぜ放浪  
人生を歩まねばならなかったのか、またそれがどのように創作に影響を与え  
ていたのかについて考えていく。その際に、彼の抱えていた心理的特質によ  
る彼独特の「生きにくさ」の変遷として、その人生を辿っていく。さらに彼  
の生と死に関する葛藤を、彼の残した日記、手紙、そして俳句を取り上げな  
がら考えていきたい。

### 1. 山頭火の生涯

ここでは山頭火の生涯を、幼少期から晩年まで、主に後に述べる山頭火の  
抱える心理的特質と深く関連する背景を中心にまとめる。その際、主に『山  
頭火 評伝・アルバム 山頭火文庫5』（2011e）と、村上護著の『ミネル  
ヴァ日本評伝選 山頭火』（2006）の内容を引用して要約していくこととす  
る。

山頭火の本名は、種田正一といい、明治15年（1882年）山口県佐波郡  
西佐波令村（現山口県防府市）において、父竹治郎（26歳）、母フサ（22  
歳）の長男として生まれる。

父は大地主の資産家に生まれ、母は同じ土地の地主の3女として生まれ

た。山頭火の生まれる2年前に二人は結婚している。祖父治郎衛門は明治3年(1870年)に46歳という若さで亡くなっており、父はまだ15歳で家督を継いで当主となっていた。

兄弟は1歳上の姉ツサ、3歳下の妹シヅ、5歳下の弟二郎、7歳下の末弟信一(5歳のときに亡くなる)の5人兄弟である。

### (1) 母の死

山頭火は、6歳(明治22年)の時に地元の尋常高等小学校に入学した。その年に父は佐波村の助役に就任している。行く行くは村長にと、周りからは期待されていた。その長男である山頭火は周りから「正さま」と呼ばれ、一目置かれる存在であったようだが、山頭火自身は、それを真に受けて自惚れるような子どもではなく、誰からも好かれる素直なよい子であったという。

母フサは、3男の信一を身ごもったときに病に倒れ、肺結核と診断される。それ以降母の容態は悪く、精神的にも不調をかかえ、母屋とは別の同じ敷地内の長屋部屋に一人寝かされて過ごすようになった。山頭火をはじめ、子どもたちはその長屋へは近づかぬように言われていた。そんな折りに、2男二郎を竹治郎の姉の嫁ぎ先へ養子に出すという話が持ち上がる。そのことをフサは非常に気にしていたらしい。また、当時竹治郎は精力的に助役の仕事につく一方で、花街に通い、女性関係に湯水のように金をつぎ込んでいた。そしてフサは、明治25年32歳のときに突然自殺する<sup>1)</sup>。山頭火はそのとき10歳であった。フサの死後、子どもたちは祖母によって育てられた。

### (2) 母の死後の一家の没落と大学進学

フサの死の翌年、竹治郎は村会議員に立候補して落選し、その後また議員としては返り咲くが、助役に再任されることはなかった。また米相場に手を出し始め、次第に商売の度を越えた多額の大勝負を繰り返すようになり、家の借金が増えていく。

山頭火は小学校高等科に進学した。成績は特に優秀だったわけではなく、明治29年(1896年)に卒業した。同年に私立周陽学舎(現山口県立防府高等学校)に進学する。周陽学舎の1年次では29番の成績であったが、学年が上がるにつれ席次はあがり、卒業時には首席になっていた。この時期に

山頭火は俳句や短歌に没頭し始め、自作の短歌を投稿するようになる。明治32年（1899年）7月に周陽学舎を卒業した山頭火は、同年9月に山口尋常中学校（現山口県立山口高等学校）4年次に編入学し、明治34年（1901年）3月に卒業。その年上京し、私立東京専門学校高等予科（現早稲田大学の前身）に入学する。翌明治35年（1902年）に早稲田大学大学部文学科に入学した。<sup>2)</sup>

山口中学時代の彼は、文化部弁論部で活躍し、外向的で偏屈なところがなく、いつも快活に笑い多弁だったという。

### （3）大学退学そして帰郷

山頭火は早稲田大学で、他の学生たち同様に当時の新しい文学に刺激を受け、特にツルゲーネフやモーパッサンなどを仲間とともに読み漁っていた。1年次の成績は約50名中の中くらいであったが、明治37年（1904年）2月に早稲田大学を退学し、帰郷する。

ノイローゼになってしまったということになっているが、真相は不明である。村上によれば、実家の経済的問題が退学せざるを得ない立場に山頭火を追い込んだのではないかと<sup>3)</sup>。

当時、父は先述したように米相場に手を出し、相当な借金を抱えていた。その借金のために土地を次々と手放し、ついには住んでいる屋敷まで切り売りするようになっていた。同年に父は任期半ばで議員を辞職している。

### （4）酒造業の経営と結婚

莫大な借金を抱えるようになった種田家は、ついにこれまで所有していた土地や家売り払い、近隣で売りに出されていた酒造所を買取り、明治40年（1907年）から酒造業をはじめ。同時に山頭火が家督を相続し、酒造業経営を担った。

明治42年（1909年）に山頭火は見合い結婚をする。相手は佐藤サキノといい、当時山頭火は27歳、サキノは20歳であった。親同士が進めた結婚であり、山頭火自身はあまり結婚に気乗りしなかったらしい。翌年に長男健が生まれる。後のサキノの回想では、「夫らしく家に納まっていたのはわずか一週間でした。それからは女房よりも酒と文学のほうが好きなようでした<sup>4)</sup>」と語るように、この頃山頭火は家業の酒造業に腰を据えて取り組むと

いうより、自分の好きな文学活動と酒に明け暮れている。

明治44年(1911年)には地元の文学雑誌『青年』を文学仲間とともに創刊し、ツルゲーネフの小説を翻訳して投稿したり、俳句を投稿したりしている。当時彼は俳号を田螺公としていて、いまだ定型の俳句を作っていた。山頭火と俳号を変えるのは大正2年(1913年)からである。同じ年に句会に参加し、俳句雑誌に多くの句を投稿するようになる。また同年荻原井泉水<sup>5)</sup>が東京で『層雲』を創刊し、新傾向の俳句活動を開始するようになると、山頭火もその後自由律の俳句に惹かれていく。

父もまた、家業よりも芸者遊びに耽るようになっていき、妾を囲う。また、新しく妻を娶って子が2人生まれている。

#### (5) 倒産そして熊本へ

句会活動を盛んにしていた山頭火だが、大正2年(1913年)の正月の句会を突然無断欠席する。そして次のような文章を句会の回覧雑誌に載せている。

私には今の處どうしても句が作れません、句作の余裕 — 句材があつてもそれを句として発表するだけの心のユトリがありません。私は此頃非常に心身が動揺してゐます。それがために殆ど家業をも省みないほどの慌しい押し詰まつた生活を続けてゐます。どうぞ私を赦して下さい。そしてもう少し考へさせて下さい。<sup>6)</sup>

この頃、山頭火は自身の俳句の創作に悩んでおり、この時期に俳号を山頭火に改めている。また、『層雲』に自由律の句を投稿し、入選している。さらに、地元で文芸雑誌『郷土』を発行することに精力を注いでいる。

編集から発送まで、ほとんど一切の事務を私一人で処理するのですから、なかなか思うように手が届きません。さらに私はかなり多忙な職業を抱えています。私は店番をしつつ、本誌を編むのです。<sup>7)</sup>

このように、酒造所の家業と並行して、文芸雑誌の発行作業にと忙しい毎日を送っている。

しかし家業を切り盛りするのはやがて妻のサキノになっていく。酒造業は素人の手にあまり、父の借金もいまだ残った状態のまま、資金繰りに苦慮するようになる。当時山頭火は脚気に罹り、病氣療養を余儀なくされ、大正3年（1914年）にはついに妻が実家から資金を調達するようになっていた。翌年に仕込んだ酒がすべて腐ってしまい、酒造所は大正5年（1916年）には倒産に陥ってしまう。

これまで父竹治郎は親戚から多額の借金をしていたが、いよいよこれで借金を返済することが不可能になった。そこで酒造所を親戚が借金のかたに引き取ることはなかったが、その時にとった竹治郎の態度が極めて不遜だったらしく、この倒産のいざごの果て、養子に行っていた二郎までもが養子先から離縁されてしまう。そして父は結局借金をそのままに行方不明になってしまう。かつて自分が入れあげた芸者の家に転がり込み、そこでも私生児を一人生み、最後は生家に近い農家の納屋に隠れ住んでいたが、大正10年（1921年）に67歳で亡くなっている。山頭火は父の葬式には帰っていない。一方、山頭火は妻と子を伴って、熊本に逃げるように移り住む。

#### （6）熊本時代と弟の死

熊本に赴いたのは、『層雲』で既知であった熊本在住の俳句仲間を頼ってのことであった。山頭火は生活の基盤を求めて、熊本で新たに古本屋を営むようになる。「雅楽多書房」と名づけ、彼の持っていた本などを置いていたが、やがて額絵額縁店「雅楽多」として再出発する。古本だけでは経営が成り立たず、額縁や複製絵画、絵葉書、花札やトランプ、偉人の肖像やプロマイドなどを置く雑貨屋になっていく。

そのうちに山頭火は店の経営に意欲を失い、店を切り盛りするのはここでも妻のサキノになっていく。店のほうは妻が取り仕切り、彼は額絵額縁売りの行商をするようになる。得意先はもっぱら学校で、明治天皇の写真を額縁に入れて売りに行くが、商売下手のためにうまく営業できず、友人に出くわすと、そのまま飲み屋に行つて飲みつぶれるということが多々あった。

この頃彼はその後の人生において常に自分を支えてくれる重要な人物と出会う。それが木村緑平である。熊本でも山頭火の存在はすでに『層雲』によって知られていて、彼の開いた店にはそうした文学好きの連中が出入りする

るようになっていた。そして地元の短歌会に誘われ、その短歌会の仲間を通して木村緑平に出会う。彼もまたすでに『層雲』で活躍する存在であったので、名前はお互いに知っていた。緑平は、大牟田の病院に勤める医者であったが、山頭火は大正8年（1919年）3月に大牟田の緑平の家を訪ねに行く。絵葉書の行商の帰りに立ち寄ったことになっている。あいにくその日緑平は病院当直があったため、短い時間に夕飯を一緒に食べて山頭火を駅に送り、緑平は病院の当直に向かった。このとき緑平は丁重に客人として山頭火を迎えたが、酒は出していなかった。翌朝早くに警察から緑平に電話があり、種田正一という者を知っているかと聞かれた。実は、山頭火はその日緑平と別れた後、汽車を待つ間に飲み始め、行商で儲けた金もすべて使い果たし、前後不覚になるまで飲み続け、はては無銭飲食のかどで警察に連行されてしまっていた。その身柄の引取りの連絡が警察から来たのであった。緑平は文句も言わずにその面倒をみている。この後、緑平は特に晩年にかけて、今回のことと同じような山頭火の失態に対する尻拭いを最後までやり続けている。この大失態の後の山頭火の緑平への詫び状が残っている。

何とお詫びを申し上げたらいいか解らなくなりました、あの日帰りましてから悪寒と慙愧とのためにズット寝ていました、私の愚劣な生活もこんどの愚劣な行動で一段落ち着きました、破れるものはみな破れてしまった、落ちるところまで落ちてきた、といたやうな気分です、兎に角これからは新しく識らなければなりません、浮かばなければなりません  
近々何とかしますが、とりあえず此のハガキを差し上げて置きます、奥様によろしく。<sup>8)</sup>

この時期、山頭火はショックな出来事に見舞われる。家の都合で養子に出され、その後また家の都合で離縁された弟の二郎が、大正7年（1919年）7月に首吊り自殺を遂げた。二郎は離縁後各地を転々とし、一時は熊本の山頭火のところにも身を寄せていたらしいが、結局将来を悲観して自らの命を絶ってしまった。山頭火が弟の死によって精神的な打撃を受けたことは想像に難くない。これは緑平宅での愚行の少し前の出来事であった。これ以降、山頭火は酔うことが多くなったという。飲んでいた席で友人に彼はこうもらしたことがあるという。

私もつまりは自殺するでせうよ。母が未だ若くして父の不行跡に対して、家の井戸に身を投げて抵抗し、たつた一人の弟がこれまた人生苦に堪え切れず、山で人知れぬ自殺を遂げてゐるから……<sup>9)</sup>

#### (7) 上京、就職そして離婚

商売に身の入らなくなった山頭火は、酔っ払って回りに迷惑をかけ続け、酔いが醒めるたびに自身でその不甲斐なさを反省する毎日を過ごしていた。

そして、大正8年(1920年)10月に文学仲間の茂森唯士を頼って、単身東京に向かう。山頭火38歳であった。彼は文学において身を立てようと上京したはずであるが、当座の生活のために職を探さねばならなかった。はじめ額縁額縁売りの行商をしたが、うまくいかず、友人に金の無心をしつつ、友人の見つけてくれた東京市水道局の管理するセメント試験場での現場作業アルバイトの職に就く。山頭火にとってははじめての肉体労働の体験であった。さすがに句作する余裕はなかったようで、この時期投稿は途絶えている。

ところで、熊本に残った妻と子は、夫の収入を当てにできず、その夫が今度ひとり勝手に上京してしまうという状況の中、またしても妻が一人で家業である「雅楽多」を切り盛りして生活する羽目になった。妻の実家ではこうした山頭火の行動に対して、当然よい印象を持たれなかった。妻の父と兄は再三サキノに離婚を勧めるようになった。そして、ついに兄が山頭火に三行半をつきつける手紙を送る。そこには離婚届が同封されていた。山頭火はそれに印を押し返信している。それを知った妻もまた判を押し、大正9年(1920年)11月に離婚が成立する。

その後同年、山頭火は、東京市役所臨時雇員に昇格し、勤め先も一ツ橋図書館になった。さらに本採用となって、そこではじめて月給取りになる。しばらくはサラリーマン生活をしていたが、相変わらず飲むと泥酔する愚行は収まらず、大正11年(1922年)11月になると、熊本に一時帰宅し、その後再び東京に戻って、12月にそのまま辞職してしまう。辞職理由は「神経衰弱」であった。夏ごろから頭が重く、ときに頭痛、不眠に陥り、食欲不振、めまい、思考力の減弱、精神が朦朧とし、健忘症状がみられたという医師の診断書が出ている。現在ならば、うつ状態と診断されるであろう。山頭

火はそのときの様子を、10月9日の友人への手紙に次のように記している。

伊東さん、急に思い立って四年振りに帰って来ました、そして長い間の不自然な生活から来る『つかれ』をしみじみ感じました。最後の線は最初の一線です、私は更に、また、足場を組みなおさなければなりません……<sup>10)</sup>

#### (8) 関東大震災と泥酔事件

大正12年(1923年)9月1日、東京に関東大震災が起こる。山頭火は当日湯島の下宿にいたが、震災に伴う大火によって彼も焼け出され、命からがら早稲田に住む友人の茂森宅に逃げ込む。他に逃げ延びてきた仲間とともに、東京からの脱出をすべく相談しあっていた。その仲間の一人が知人の家に預けておいた荷物を取りに行くことになったが、それに山頭火も付き添った。たまたまその知人が当時の憲兵隊の社会主義者のブラック・リストに載っており、山頭火たちは張り込みをしていた憲兵隊に拘束されてしまう。そして、社会主義者と誤解されたまま、山頭火は巢鴨刑務所に放り込まれてしまう。そこで尋問を受ける羽目になり、結局、山頭火は内務省に勤めていた茂森の弟の計らいで釈放はされたが、憔悴しきってしまった。

9月半ばになって山頭火は九州出身の仲間たちと東京を脱出し、九州に向かった。途中、仲間の一人が腸チフスで亡くなってしまうということなどもあり、山頭火の精神的ストレスが極度に高まって、仲間が心配して彼を先に熊本へと帰らせた。

結局9月末になってようやく山頭火は離婚したサキノの経営する「雅楽多」に帰ってくる。しかし、サキノは彼を拒否した。帰るところのない彼は、結婚のため帰郷していた茂森を頼り、その世話で下宿することになる。しばらくは額縁売りの行商をしていたが、再び上京する。しかしまた熊本に戻り、結局大正13年(1924年)6月には離婚したサキノのところで同居し始める。息子健の世話をしていたようであり、上級学校への進学をあきらめて働くつもりでいた息子について、サキノを説得して中学進学をさせたりしている。

しばらくは落ち着いていた様子だったが、同年12月、彼は泥酔して熊本の市電の路面電車の前に急に飛び出して立ちほだかり、その電車を止めてし

まった。運転手が急停車させたため事故にはならなかったが、それに巻き込まれた乗客たちが山頭火を取り囲んで烈しく責め立て始め、大騒ぎとなってしまう。たまたまそこに居合わせた山頭火を見知っている地元の新聞記者が山頭火を叱りつけ、禅寺まで連れて行き、彼をそこに預けた。

#### (9) 出家、乞食修行そして放浪

山頭火が預けられた寺は曹洞宗の報恩寺というところで、当時の住職は後に熊本の名刹大慈禅寺の住職となる望月義庵であった<sup>11)</sup>。山頭火は家に帰らず、ここで読経、座禅、作務に勤め、3ヵ月後に出家する。彼はこの年43歳であり、法名は種田耕畝である。

得度した彼は、その後報恩寺を出て、末寺の瑞泉寺の堂守となって一人山林に住まう。同時に、そのことを地元の句会仲間に知らせて、以降俳句の活動を再開するようになる。堂守の日常は、時間になると鐘をつく、近辺を托鉢するといった極めて孤独な生活であり、山頭火も、はじめのうちはそうした乞食こつじきの修行を志していたが、徐々に俳句仲間と飲み歩くようになり、托鉢も近辺ですまなくなり、大分の佐伯まで足を伸ばしたりするようになる。

そして大正15年(1926年)4月には堂守の生活をあきらめ、乞食の旅に出る。熊本から宮崎県高千穂、さらには日向路を目指す放浪の旅である。この旅において山頭火は以下の有名な句を読んでいる。

分け入っても分け入っても青い山<sup>12)</sup>

10月頃には故郷の防府に立ち寄り、町役場で戸籍上の名前を耕畝に変えている。さらに『層雲』に句を発表し、俳句の世界に復帰する。

#### (10) 乞食旅と定住の狭間

明けて昭和2年(1927年)には広島瀬戸内海の島に行き、次年には山陽道、山陰道、四国、九州をあてどなく乞食旅をしていたらしい。当時はまだ托鉢僧としての修行の旅であったらしく、後年の放浪の旅とは意識が違っていった様子である。旅の間知り合いに会うこともなかったようであり、当時の記録もそのために残っていない。ただ、四国においては、四国八十八箇所やくわんはちじゅうはちの巡礼の旅をしていたらしい。

昭和4年(1929年)3月に山頭火は熊本の「雅楽多」に帰り、8月までそこで過ごし、俳句仲間と交遊する。熊本に戻った訳は、その前に炭鉱で働いていた19歳の息子健に会い、そこで息子により専門的な技術を身につけさせたいと考え、上級専門学校への進学を勧めたことによる。山頭火は父親として息子の将来を気にし、妻を説得するために戻ったのである。

そのまま山頭火は「雅楽多」の店番をする。修行の僧としての自覚はすたなく、彼は家業の店番に取まってしまう。そして、旧友の俳句仲間と連絡を取り、句会活動を盛んにする。しかし家業においては10日もするとまた「神経衰弱」になってしまう。店自体は非常に繁盛していたようで、店番としては忙しかったようであり、夜の11時過ぎまで店を開けていた。当時の心境を彼は次のような句と手紙に残している。

迷うた道でそのまま泊まる<sup>13)</sup>

……私はぶらぶら歩いてここまで来ましたが、憂鬱なるばかりです、とにかく、もう一度談合して、今生の最後の未知に入りたいと念じてをります、山の中を歩いてさへいれば、そして水を味わうてさへいれば、私は幸福であります(そして同時に周囲も幸福でありませう、そう考へてゐなければ、こんな我儘な生き方が出来るものではありません)……<sup>14)</sup>

#### (11) 草庵「三八九」と俳句個人雑誌の発行とその失敗

徐々に「雅楽多」での家庭生活に飽き、落ち着けない山頭火は、昭和4年(1929年)9月に再び乞食の旅に出る。今度は九州三十三箇所観音の巡礼の旅を思いつく。しかし、12月に入って天候が荒れ始め、10番目で山頭火はくじけてしまう。そして次第に旅をする自分に疑問を持ち始める。

昭和5年(1930年)9月に再度宮崎へ行乞旅をした後に、彼は草庵を結ぶことを決意し、12月30日には熊本に帰ってくる。彼は友人の友枝蓼平らの支援によって、熊本市内の貸室さんぼくに居を構える。

草庵を「三八九居」と名づけ、会員を募って俳句雑誌である個人誌『三八九』を発行し、その収入を持って生活の糧とする計画であった。そのための資金はみな友人からの借金である。極めて先の見通しの甘い計画であり、取らぬ狸の皮算用的な行動であった。その際、彼はアルコールをやめると謳っ

ているが、実際のところはまったく口だけの約束であった。

昭和6年（1931年）になり50歳になった山頭火は、個人雑誌の編集と発行を勇んで行うが、結局会員からの入会金に手をつけ、それを飲み代に費やしてしまい、窮してまた友人に新たな借金をするという悪循環に陥ってしまう。結局3ヶ月あまりで不安定な生活に陥ってしまい、あげくには泥酔し、無銭飲食で警察署の留置所に収容されてしまう。それをまた友人が貰い受けに行く。こうして個人誌『三八九』は3号で休止となる。

## （12）草庵探し、其中庵の生活

この草庵計画も頓挫し、昭和6年（1931年）6月に彼は「三八九居」を引き払い、「雅楽多」に一時戻る。12月に再び乞食の旅に出て、4月末まで九州北部を行乞する。その日の宿泊代にも窮し、明日生きられるかどうかの瀬戸際の中、生きるための托鉢をし、旅を続ける。この時期に山頭火は次のような句を残し、自身の生き方、そして死、また俳句への思いについて、深く考えることが多くなっていく。

うしろすがたのしぐれてゆくか<sup>15)</sup>

5月には山口地方の川棚温泉の地に草庵を結ぶ決意をする。草庵の場所の条件として、彼にとって水のよいところ、あるいは温泉地であることが大事であり、最初は玉名温泉が彼にとって理想の地と映った。そう思い込むと行動せずにはいられない彼は、緑平に援助を仰ぐ。しかしなかなか話が進まず、たまたま川棚温泉で滞在している最中に急な発熱に襲われ、その地で寝込んでしまった。それをきっかけに、急に彼は心変わりし、この地を死に場所と定めて草庵作りを計画する。保証人探しに奔走し、また親類、知人に資金の援助を頼んで回るが、結局この計画は頓挫する。この時期、彼は最初の句集『鉢の子』を発刊する。

草庵作りをあきらめかけたとき、ある友人から手ごろな場所を紹介される。それは生まれ故郷の防府から20キロあまり離れた閑静な山裾にある廃屋であった。早速友人の力を借りて、9月には草庵作りをし、これを其<sup>ごちゆう</sup>中庵<sup>あん</sup>と名づける。

### (13) 漂白の旅そして自殺未遂

そして、中断していた個人誌『三八九』を昭和8年(1933年)に第5、6集と出し、また第2句集『草木塔』<sup>そうもくとう</sup>を刊行する。念願の草庵の人となった山頭火であったが、それは世俗から離れて俳句の道に精進するということの意味しない。俳句仲間が多く訪問するようになり、そのたびに彼は酒を飲み、飲めばいつも「ドロドロボロボロ」になるまで泥酔してしまう。この草庵の生活を支えたのは、托鉢や俳句ではなく、息子の仕送りであった。息子は専門学校を卒業後、新たに炭鉱の職についていた。

また、行乞旅もあいかわらず頻繁に行っている。昭和9年(1934年)2月には福岡地方へ、3月には漂白の俳人井月<sup>16)</sup>を偲んで信州伊那へ向かうが、途中で肺炎に罹り、その旅は途中で断念している。

昭和10年(1935年)に入って其中庵で過ごす日が多くなるが、2月には第3句集『山行水行』<sup>さんこうすいこう</sup>を出し、7月には北九州へと行乞旅に出るが、一方で8月に睡眠薬を過量服薬して自殺未遂をしている。

### (14) 死出の旅

自殺未遂からしばらく後、12月には彼は死に場所を求めて、再び8ヶ月におよぶ長い行乞旅に出る。芭蕉を意識して、その足跡をたどる東北への旅である。彼はまず九州から山陽へ、第4句集『雑草風景』を出しつつ、昭和11年(1936年)3月には門司より船で神戸に渡り、大阪、京都、伊賀上野を経て、伊勢神宮を参拝し、4月に鎌倉を経て東京に至る。東京では『層雲』の大会に参加し、多くの旧友と酒を飲み明かし、5月に甲州、信濃路を歩き、6月に新潟の良寛遺跡を巡り、山形、仙台を経て、平泉に至る。彼の芭蕉をたどる旅はこれで終わり、7月に永平寺に5日間参籠した後、其中庵に戻っている。平泉に着いた際に詠んだものが次の句である。

ここまでを来し水飲んで去る<sup>17)</sup>

### (15) 再就職そして再び草庵づくり

山頭火は死に場所を探しに旅へ出たはずだったが死ぬことはなく、昭和12年(1937年)9月には山をおりて市井の人になるべく決意し、就職を企てる。それは下関の材木間屋での材木受け渡しの現場仕事であった。小船に

乗って海上を往来して材木受け渡しの帳面付けをするのが主な仕事であったが、当然慣れない肉体労働と年齢的な無理があり、また根気もなく、5日目にして職場放棄をする。そして数日後にはまた其中庵に舞い戻ってしまう。

さらに11月には湯田温泉で泥酔状態となって、無銭飲食のかどで留置所に5日間留置される。このときの飲み代の支払いは、結局息子からの電報為替が届いて済んでしまう。

このような自堕落な生活を続ける山頭火は、ついに其中庵を捨てて、再び旅に出る決意をする。彼は第5句集『柿の葉』も刊行して、句作に熱心な一方、「身辺整理」という表現で、この時期、自分へ意識を向けている。しかし実のところ、其中庵の雨漏りがひどくなり、住めない状態に陥っていたという事情もある。当然彼にはその家の修繕をする資金がないのである。昭和13年(1938年)3月に大分地方を行乞し、俳句仲間ときかんに交遊する。11月にはついに其中庵が崩れて住むことができなくなり、たまたまよく出かけていた湯田温泉に四畳半一間の家屋を見つけ、そこを借りて「風来居」と名づけて、この街のはずれに転居する。

#### (16) 行乞旅から乞食旅へ

昭和14年(1939年)に入ると、「風来居」を拠点にして、第6句集『孤<sup>こ</sup>寒』を出す一方、そこでの生活に腰が落ち着かず、3月には近畿、東海を旅し、以前果たせなかった井月の墓参りをし、9月には四国に再び渡る。四国遍路の旅である。

この時期、彼は酒の影響で体調を崩すことが多くなり、自身の死を意識し始め、自分の余命はあと1年であると考えていた。つまりは死に場所を求めての旅であった。彼はこの旅で、これまで身につけていた墨染めの衣を捨て、托鉢のための鉄鉢も友人に譲ってしまい、まさに己の身体ひとつで歩く。唯一持ち歩いたのが母の位牌であったといわれている。当然だが、托鉢が出来ない分もらいは少なく、旅は苦しいものであった。

四国松山では、すでに山頭火の俳人としての評価が高く、彼は松山で暖かく迎え入れられる。そして、そこで納屋を改造してもらい、「一草庵」と名づけて、住み始める。

## (17) 終焉

松山に居を構えた山頭火は、これまでの自身の句集をひとつにまとめ、昭和15年(1940年)4月に『草木塔』として東京の八雲書店から刊行する。その句集を俳句仲間へ献呈するため、中国、九州を旅して、6月に「一草庵」に戻る。これが最後の旅となった。10月10日夜に、「一草庵」で句会を開くが、深酒で体調が思わしくなく、自分は参加せずに寝ていた。酩酊はいつものことであるので、周りの者も気にせず散会したが、明け方に一人息を引き取る。死因は心臓麻痺であった。享年58歳であった。

## 2. 山頭火の俳句と日記にみる生と死の表現

### (1) トリックスターとしての人生

山頭火の人生は、漂泊と定住の終わりのない繰り返しであった。彼の人生のつまずきの発端は大学中退である。詳しい記録がないため、この時に何が山頭火にあったのか確かなことは分からない。しかし、この時期から彼は徐々に世間一般のルートから外れ始める。普通、大学生活の次に人生において取り組まなければならない課題は、社会人になることである。彼も帰郷後、家督を継いで酒蔵経営者となり、結婚もし、子どもももうけているわけで、外側からみれば社会人としての肩書は手に入れている。しかし、内実はこれまで触れてきたように、とてもまともな社会人とはいえない。いわば、人生の落第をしている状態となる。

はじめのうち彼は、そうした自分のふがいなさを意識し、一応の努力はしてみている。禅僧修行、堂守、肉体労働、そしてサラリーマンになってみたが、そのいずれも長続きしない。彼は定住あるいは卒にはまった生活という状態に対して、ある種の困惑と窮屈を感じ、そこからいつも衝動的に逃げ出してしまう。そうした自身の生活態度への心情を彼は以下のような手紙に記している。

大正4年3月 荻原井泉水あて『層雲』掲載

……私は昨日まで自分は真面目であると信じて居りました、その信念が今日すつかり崩れてしまひました、私はまた根本から築かねばなりません、積んでは崩し、崩しては積むのが私の運命かもしれませんが、兎

に角、私はまた積まねばなりません、根こそぎ倒れた塔の破片をぞつと見てゐる事は私には出来ません、私は賽の河原の小児のやうに赤鬼青鬼に責められてゐます、赤鬼青鬼は私の腹の底で地団太を踏んで居るので、実人生は真面目でありたいとか、真面目でなければならぬとかいふ事を許さないほど余裕のないものであります、真面目な人は真面目になるもならないもない、真面目な生活しか生きえないではありませんか……<sup>18)</sup>

そして、いつも彼は旅に出る。行乞旅は、彼にとっては禪の修行ではなく、定住から逃げ出すための一種のカモフラージュであった。その心の様子を『行乞日記』の中でこう記している。

昭和5年12月18・19日

終日歩いた、ただ歩いた。雨の中を泥土の中を歩き続けた。歩かずにはゐられないのだ。ちつとしてゐては死ぬる外ないのだ。宿について、湯に入つて、ほつとする、行乞は嫌だ、流浪も嫌だ、嫌なことをしなければならぬから、なほなほ嫌だ。<sup>19)</sup>

旅での彼は、定住生活に比べて、生き生きとした活動的な姿をみせる。例えば、昭和11年の東北への旅の途中に滞在した宿での様子を『期中日記』に以下のように記している。

昭和11年5月22日

午後、宿のおかみさんに案内されて、しづかなきれいななぎの湯といふのへゆく、なるほど不便なだけしづかで、紙ぎれや綿きれがちらばつてゐない、しかしこもやつぱり特有の男女混浴だ、男一人（私に）女五人（二人はダルマ、二人は田舎娘、一人は宿のおかみさんだ、）ぶくぶく下から湧く、透き通つて底の石が見える。

飯途、一杯また一杯、酔つぱらつて、おしやべり、一それもよからうではありませんか！ぼろぼろ どろどろ<sup>20)</sup>

さらに、彼の特徴は自身の行動への無責任さにある。彼は、自力で自分そ

して家族を養ったことがない。酒造所の経営、そして「雅楽多」経営はいずれも妻が、草庵生活や俳句雑誌は友人、そして息子の経済的援助によって成り立っている。彼は何もしていない。また、他人に援助を求めながら、感謝の言葉も乾かぬうちにそれを飲み代に費やしてしまう。そして、それを反省するような言葉を口にする一方で、まるでそれは同じ人間がした行動かと疑いたくなるほど、その後の行動にはまったく反映されないのである。例えば、次のようなエピソードがある。彼は料亭で飲みつぶれて、その料金が15円にのぼり、その支払いをたまたま句会で知り合った初対面の若者に頼む。次の手紙は熊本で3日前に句会で知り合ったその若者に出したものである。

大正6年3月13日 友人あて手紙

十日の夜は失礼いたしました。私は飯途ちよつと当地に下車しました、そしてとりかえしのつかない失敗をしました、私は今、非常な窮地に立つてをります。あなた方に対してこんな事を申上げては実に済みませんけれど金を拾五円ほど貸していただけませんか。飯宅すれば直ぐお返しいたします、どうぞ私の心情をお察し下さつて此窮境から救ひ出して下さるやうに切に切にお願いいたします、此手紙を持つてゆく人は若いおかみさんであります、どうぞ此人へ直接お渡し下さるやうに願ひます、私は此おかみさんの宅で待つてをります。<sup>21)</sup>

15円は当時の若者の月給よりはるかに高い金額である。この手紙を受け取った友人は積立貯金を下ろして用立てし、料亭にその金を直に持つていくと、当の山頭火は料亭旅館の2階で布団をかぶつてのんきに寝ていた。友人は尊敬する山頭火を助けたことの方に気持ちがいつているので、この山頭火の態度に呆れたりせず、その後も俳句の指導を彼に受けたりしている。しかし、結局山頭火はこの友人に借りたお金を返していない。

このように、彼の俳句の才能、そしてたぶん彼の愛嬌のある性格から、周りの人間は彼を糾弾せず、愛し続け、援助し続け、だまされ続ける。緑平から川棚で庵を結ぶことの許可をもらった山頭火は、まったく無邪気に日記に「……一日も早く土地を借りてバラックを建てなければならぬ、フレイ、フレイ、サントウカ、バンザアイ！……」<sup>22)</sup>と書いている。

そうした彼の在り様は、まさにトリックスターの資質によって説明できるだろう。その資質とは、①愛嬌、②悪意のないうそ、③無責任・衝動的・欲に正直、④周りはだまされても、援助し続けるといったものである。トリックスター神話は、ウィネバコ・インディアンの神話で有名であるが、ラディン（1974）はトリックスターを「創造者であって、破壊者、贈与者であって反対者、他をだまし、自分がだまされる人物」（9頁）であり、「彼は意識的には何も欲していない。抑えつけることのできぬ衝動からのように、彼は常にやむなく振舞っている。彼は善も悪も知らないが、両方に対して責任はある。道徳的、あるいは社会的な価値は持たず、情念と食欲に左右されているが、その行動を通じて、すべての価値が生まれ来る」（9-10頁）と述べている。

ウィネバコ・インディアンの神話のあらすじは次のような内容である。トリックスターである酋長が、敵対する他の部族との戦闘を指揮するといった社会的役割があったはずであるのに、村人をだまして、酒だけ飲んで戦わず、これを3回繰り返した後に、ようやく酋長として戦いに出るために旅に出る。しかし、旅をするうちに、いつのまにか最初の目的は忘れられ、旅をすることが目的になり、その旅の中で様々ないたずら、迷惑、創造、破壊を繰り返す。つまりひたすら欲を満たす旅を繰り返すが、同時に彼の失敗が新たな創造につながっていく。さらに彼は自分の右手と左手を戦わせるが、これは自分の統一感がないことを象徴し、旅の中で様々な存在に変身することもまた、すべては仮の姿であるということの意味している。

現実生活に住みにくさを感じた彼はやがて、森の中に小屋を建てて動物たちと住みはじめるが、寒さで飢え、その生活からも逃げだし、再び村に出ていたずらをし、また旅にと、漂泊と定住どちらにも留まらず、これを繰り返す。最後は、人のいい男の好意で村に小屋を建ててもらい村のために働くが、また唐突に旅に出て、突然最後の食事をして理由もなく天に昇って消える。

山頭火の人生も、まさにこの神話のストーリーのように、永遠に漂泊と定住の狭間で揺れ続け、世間一般の道徳的価値や社会的価値を持ち得ずに、ひたすら自身の欲に左右されている。しかしなぜか周りから許され庇護され、彼の破天荒なその行動そして自由律という俳句を通じて、彼にしかなし得ない創造的価値が生み出されていった。

## (2) 発達障害の視点から

彼の衝動的行動そしてうつめ気分の繰り返しから、彼の精神病理を双極性障害とみなすこともできるが、彼の場合、一般的な双極性障害にみられるような破滅的躁状態にまで陥ることもないし、うつにみられる本当の罪悪感を抱いていたこともないと思われる。彼は基本的には「軽い」のである。それでは、彼のこの行動における特徴的な問題は何によるものだろうか。

発達障害のうち、注意欠如・多動症／注意欠如・多動性障害（以下、ADHD）と呼ばれる障害がある。ADHD は次の表 1 のような特徴を有しており、生まれながらにして持っている気質である。なお、表中に山頭火の特徴として当てはまる項目には○を、資料の不足から確定できないが可能性が高いものを△、資料不足のため不明なものに？を記した。

大人の ADHD の問題として、子どもの時はやんちゃで愛嬌のある子として、多少の落ち着きのなさや衝動性は見過ごされて周りへと適応できていても、いざ社会人となった時に、そうした子どもじみた態度は当然周りから拒絶され、そこで本人がはじめて不適応と感じるようになることがある。

アイデアを出したり、行動に移したりすることは得意で、友人と遊んだり、楽しいことをすることにかけては意欲的で活動的だが、思いつきで行動し、人の話を聞かない、無計画で衝動的な行動で、周りが迷惑をこうむったりする。たいていは事がうまく最後までいかないで途中で投げ出してしまふ。いつも途中で飽きてしまい、すぐ別の行動に気が移ってしまう。そのことによって周りからは無責任、無節操、厚顔無恥と思われることが多い（高柳，2014）。しかし、その行動の意図には悪意がないことが多いことと、もって生まれた社交性、愛嬌のよさ、素直さからから、周りが自然とフォローし、助けられて何とか社会で排除されずにすんでいることも多い。また、ADHD の人は生来人好きが多く、親や先生、友人に認められ、受け入れられたいという思いが強い（熊崎，2014）。しかし、それゆえに思春期以降になると、自身の不注意や衝動的行動による失敗体験によって、周囲との関係に亀裂が入ったりし、挫折感、孤独感、不安感に悩むことも多くなる。ADHD の問題の本質は、不注意と多動性、衝動性であるが、山頭火もまさにこの特徴を有している。

山頭火

表1 アメリカ精神医学会の診断基準第5版 (DSM-5) による  
注意欠如・多動症/注意欠如・多動性障害の診断基準

A1 :	以下の不注意症状が6つ (17歳以上では5つ) 以上あり、6ヶ月以上にわたって持続している。
a	細やかな注意ができず、ケアレスミスをしやすい。
b ○	注意を持続することが困難
c	うわの空や注意散漫で、話をきちんと聞けないように見える。
d ○	指示に従えず、課題が果たせない。
e ○	課題や活動を順序だてることがしばしば困難である。
f ○	精神的努力の持続が必要な課題を嫌う。
g	課題や活動に必要なものを忘れがちである。
h ○	外部からの刺激で注意散漫となりやすい。
i ○	日々の活動を忘れがちである。(お金の支払い、約束など)
A2 :	以下の多動性/衝動性の症状が6つ (17歳以上では5つ) 以上あり、6ヶ月以上にわたって持続している。
a	手足をもじもじしたり、そわそわした動きをする。 着席が期待されている場面で離席する。
b ○	不適切な状況で走り回ったりよじ登ったりする。(成人の場合は、落ち着かない感じのみ)
c ○	静かに遊んだり余暇を過ごすことができない。
d ○	衝動に駆られて突き動かされるような感じがして、じっとしていることができない。
e ○	しゃべりすぎる。
f	質問が終わる前にうっかり答え始める。
g	順番待ちが苦手である。
h ○	他の人の邪魔をしたり、割り込んだりする。(おせっかい)
B : ?	不注意、多動性/衝動性の症状のいくつかは12歳までに存在していた。
C : ○	不注意、多動性/衝動性の症状のいくつかは2つ以上の環境(家庭・学校・職場・社交場面など)で存在している。
D : ○	症状が社会・学業・職業機能を損ねている明らかな証拠がある。
E : △	統合失調症や他の精神障害の経過で生じたのではなく、それらで説明することもできない。

ADHDのこうした症状の背景には、外部刺激に敏感で、刺激によって注意が拡散してしまうために、「実行機能の障害」が生じているという事態が想定される(熊崎, 2014)。また、「報酬系の強化障害」があるといわれ、これは動機づけに関する報酬系の障害で、この障害を抱えると、報酬をすぐにもらえないといわれず、楽しみは後に取っておくとか、報酬を貯めて後で計画的にもらうといった行動が苦手といった問題を生じやすくなる。さら

に、「時間処理障害」も ADHD の主たる認知障害であり、時間的不注意や段取りの悪さがその特徴である（友田, 2014）。行動上は不注意が多くなり、ケアレスミスがおきやすく、仕事を集中して持続することが出来ない、仕事を順序だてて計画的に遂行することが出来ないといったことになる。

つまり、面倒な仕事は後回しにして、つい目の前にある心地よい刺激に心が奪われてしまう。結局、計画通りに進まないため失敗経験が多くなり、そのことによって自信が失われ、自己否定の気持ちが強くなる。こうした悪循環を ADHD の人は持ちやすい。山頭火も活動的にはなるが、それでうまくいかずに落ち込み、その時は自分を責めるが、また次の刺激に反応して行動してしまう。つまり、じっとしていられない、熟慮して行動することができないわけである。

また、ADHD は物質使用障害（アルコール・薬物）の並存する割合が高いことで知られている（熊崎, 2014）。先の「報酬系の強化障害」があるため、ストレスにさらされると、我慢できず、すぐその場で不満を解消したくなり、快刺激を求めてアルコールなどに手を出してしまう。つまり、ADHD の人の訴える不調やうつ症状の多くは、「不満」や「退屈」であって、気分の落ち込みではない。これが双極性障害と大きく異なる（ウェンダー, 2002）。そして、この「退屈」を ADHD は我慢することが苦手で、それをすぐに解消しようとして「興奮」を追求する。その手段の一つがアルコールである。彼らの「うつ」は興奮によって即座にかつ即物的に解消してしまう。傍からみれば、さっきまであれほど落ち込んでいたのに、まるで別人のように元気になっており、果たしてあれは本当だったのかといぶかしく思われることが多い。また当然だが、アルコールは脳の覚醒を一時的に促進させる。ADHD の人にとっては、アルコールを飲めば、普段よりも集中力が増し、活動的になるわけである。ADHD の治療に用いられる薬物が覚せい剤であることを思えば当然であろう。

山頭火も、酒の席では普段よりも饒舌で、かつ鋭い目をして鋭いことを論じることが多かったようである。また、彼は手紙魔であり、旅の間、草庵にいる間、常に手紙を書いている。旅の途中でも郵便局止めで、友人からの返信を読んでいる。彼は基本的におしゃべりなのである。こうした ADHD の症状は生涯続くと考えられている。山頭火も死ぬまでこうした ADHD 的な行動は続いた。

以上のように、山頭火がADHDという障害を抱えていたと仮定すれば、彼の不可解な繰り返しの人生についても腑に落ちることが多い。彼の不義理や無責任さを彼の性格の悪さや彼の人格的問題として捉えて糾弾することは不当である。同様に、現代において社会一般の人たちがADHDを抱えた人たちに対して抱く偏見も、障害に対する無知によって引き起こされ、ADHDの人たちを苦しめている。山頭火自身もまた自分の障害に苦しめられ、それでも社会の中で何とか生き続けたのである。

### 3. イニシエートされない人—永遠の少年としての山頭火

ヘンダーソン(1985)は、その著書『夢と神話の世界 通過儀礼の深層心理学的解明』のなかで、「永遠の少年」をイニシエートしていない人として取りあげ、それを深層心理学的には、トリックスター周期から英雄周期の間に位置する人々として述べている。現代においてはもちろん外的社会的ではなく内的心理学的にはあるが、一人の青年が社会に一人前の大人として参入するときに、大人になるための通過儀礼がなされる。通過儀礼を通して、子どもとしてのトリックスター的心性から、大人としての英雄的心性へと心理的課題が進むわけであるが、「永遠の少年」は、大人になることを拒絶し、トリックスター的心性を保持しつつ、大人の世界で生きていく。つまり、それは社会的秩序からはずれ、社会秩序の維持の責任を回避し、自らの力で独立することを拒み、他者に依存し、定住しない生き方である。

「永遠の少年」の特徴は、その二重性にあるとヘンダーソンは指摘している。トリックスターの周期の特徴は、「欲求によって完全に統御され支配されており、そして残酷で、冷笑的で、無常であるが、しかし、業績を次々に重ねていくにつれて、行動の散漫さが次第に消失して、やがては人間としての外形を整えて出現すようになる」(41頁)というもので、一方、英雄の周期は双子によって象徴され、一方は「定着して」おり、他方は「所属していない」(42頁)。つまり、熟考する内的力と有効な活動を行う外的な能力とを結合する自我形態が英雄の心理学的意味である。

トリックスターが快楽的、幼児的欲求によって衝動的に行動を起こし、秩序を超えた(あるいは秩序を無視した)様々な生活態度をもたらし、やがてそうした状態と周囲との間に軋轢が生じ、それが外的強制として働き、これ

によってトリックスターは失敗や挫折を経験する。つまり、それまではいたずら、機知、悪ふざけと友好的に捉えられたことも、悪意、破壊者、悪者として糾弾されるようになり、彼はますます社会からはじき出され、孤独を経験する。しかしやがてこのトリックスターの知恵は、英雄としての叡智となって社会で再び認められ再生する。

このように、通常はトリックスターから英雄への心理的移行が青年期以降に起こるわけであるが、「永遠の少年」はこの中間でとどまり続けてしまう。それはイニシエーション自体が循環的性質であることが影響しているとヘンダーソンはいう（202頁）。「イニシエーションの失敗」というこの重要なテーマには、イニシエーションの循環的な性質が強調されている。イニシエーションの本質は「旅」つまりは移行である。自分を保護してくれた母の世界から分離し、旅によって自分自身の本来の人間の価値だけに頼って生き残ること、それがイニシエーションであり、旅の目的でもある。

ヘンダーソンは、「探索する英雄が失敗するのは、イニシエーションに必要な意識を、ほんの短期間しか保持し得ないからである」（202頁）といている。同時に、イニシエーションの失敗は逆説的にイニシエートを促進させる。ヘンダーソンは、「探索する英雄は、自分が部分的にしかイニシエーションを遂げていないという体験を忘れないで、さらに将来その探索を完成すべく自ら準備を整えること」（202頁）が必要であるという。この「記憶」するということが重要で、それによって旅と帰還後の生活との間の結合を維持する。つまり、社会からの解放という一面だけではだめで、社会に戻ってそこに自らを位置づけるという循環が伴わなければイニシエーションは完成しない（203頁）。原初的な一体性だけではトリックスター的にとどまり続け、すべてがこれに回帰して永遠に繰り返すということになりかねない。この永遠の回帰から抜けるには、自我が「青年と成人との境界において、ひとつのイメージにとどまることをやめ」、「トリックスターや英雄のイメージとの同一化を続けることを拒み、すべての元型的な自己のイメージの影響から一時的に分離する能力をもつこと」（214頁）が必要である。つまり、二重性の自分を二重性としてそのまま両方を忘れずに受け入れること、どちらかの理想的単一性を求めること（元型への同一化）をやめることであり、それが「忘れない」ということでもある。それは体験がすべて自分自身の中で起こったことであり、連続性を持っているという感覚である。

しかし、ADHD の場合、こうした時間的処理機能の障害が伴うため、この移行が難しいのではないだろうか。山頭火がそうであるように、ADHD の障害を抱える人は、永遠に旅をし続け定住と旅の繰り返しという、「永遠の少年」のイニシエートされない苦しさをその人生の本質としてもっているのではないだろうか。山頭火もこの永遠の回帰から抜け出せないことへの苦悶をたくさん経験している。昭和 5 年（1930 年）、山頭火は睡眠薬の過量服薬による自殺未遂を起こしている。その後再び旅に出るが、その際にこれまでの日記をすべて燃やしてしまっている。それは心機一転の心持ちであり、ここで彼は心理的な意味において一度死んだのではないだろうか。再生をかけて彼は旅に出るが、昭和 5 年 9 月 14 日の日記にその苦悩を次のように記している。

……やつぱりさみしい、さみしい、さみしい。……私は今、私の過去一切を清算しなければならなくなつてゐるのである、ただ捨てても捨てても捨てきれないものに涙が流れるのである。……<sup>23)</sup>

そしてさらに、こう続け、自身の生き様を「記憶」ととどめるために、日記を書き始めることを宣言する。この内容から察するに、彼は実は「永遠の少年」のイニシエートされない苦しさをかなり自覚していたのではないだろうか。

所詮、乞食坊主の何物でもない私だつた、愚かな旅人として一生流転せずにはゐられない私だつた、浮草のように、あの岸からこの岸へ、みじめなやすらかさを享受してゐる私をあはれみ且つよろこぶ。

水は流れる、雲は動いて止まらない、風が吹けば木の葉が散る、魚ゆいて魚の如く、鳥とんで鳥に似たり、それでは、二本の足よ、歩けるだけ歩け、行けるところまで行け。

旅のあけくれ、かれに触れこれに触れて、うつりゆく心の影をありのままに写さう。

私の生涯の記録として行乞記を作る。<sup>24)</sup>

## 4. 山頭火の俳句にみる生と死の表現

### (1) 初期・中期の俳句

山頭火の初期・中期の俳句には、自身のありようを表現している句がいくつもみられるが、自分の大人としての落ちこぼれぶりを自嘲気味に語るものが多く、また、一方で自負心も強く、人からだめさ加減を指摘されることに対して敏感になっている。どこかそこには甘えが潜んでおり、「わかっちゃいるけどやめられない」という心境が的を射ているだろう。しかし、前出の「分け入つても分け入つても青い山」<sup>25)</sup>、「うしろすがたのしぐれてゆくか」<sup>26)</sup>のように、「旅」の永遠のループにはまり込んでいる自分をどこかで自覚している。

酒も断たん身は<sup>こがらし</sup>凧の吹くままに (大正元年)<sup>27)</sup>

今日も事なし凧に酒量るのみ (大正3年)<sup>28)</sup>

侮られて寒い日だ (昭和5年)<sup>29)</sup>

明日は明日のこととして寝ませうよ (昭和5年)<sup>30)</sup>

詫手紙かいてさうして風呂へゆく (昭和6年)<sup>31)</sup>

もう飲むまいカタミの酒杯を撫でてゐる (昭和7年)<sup>32)</sup>

### (2) 晩年の俳句

一方、晩年の俳句には、「死」ということについての自分のイメージを俳句に託すことが多くなる。終わりのない「旅」の連鎖からどう降りるのか、それが山頭火にとっての「死」なのではないだろうか。彼は托鉢をやめる。「だます」ことをやめるのである。トリックスター的な知恵を放棄し、一介の乞食となる。彼にとってこの過程こそがイニシエートするために大事なことだったように思える。トリックスターではなく、ただの何もない人間になるということが乞食旅の意味だったのではないだろうか。彼はそこで本当に

困り、生きるか死ぬかの瀬戸際まで追い込まれる。と同時に自身のそもそもの本質をそのまま受け入れていく姿勢が彼の中で生じ、それが俳句として表現される。

なかなか死ねない彼岸花さく（昭和 14 年）<sup>33)</sup>

泊めてくれない折からの月が行手に（昭和 14 年）<sup>34)</sup>

泊まる場所がないどかりと暮れた（昭和 14 年）<sup>35)</sup>

だんだん似てくる癖の、父はもうみない（昭和 15 年）<sup>36)</sup>

六十にして落ちつけないこゝろ海をわたる（昭和 15 年）<sup>37)</sup>

なまけものかしみじみなまけものをながめてゐる（昭和 15 年）<sup>38)</sup>

ぶすりと音たてて虫は焼け死んだ（昭和 15 年）<sup>39)</sup>

ここには、初期の頃のような天邪鬼、甘え的な自嘲ではなく、客観的に自己を見つめて、それを自分として認める姿が垣間見られるように思われる。しかし、それゆえに彼の「落ちつけないこゝろ」の本質は死ぬまで変えようがなかったのである。

## 注

- 1) 長屋のそばにある井戸に身投げしたという伝聞と、長屋内で首吊り自殺したという伝聞があるが、どちらが事実であるかは不明。また、山頭火自身による母の死の述懐はない。
- 2) 東京専門学校は明治 35 年に早稲田大学と改称し、彼はその第 1 期生である。彼は坪内逍遙から倫理学や英文学の講義を受けている。村上護（2006）、35 頁参照。
- 3) 村上（2006）、38 頁参照。
- 4) 村上（2006）、43 頁参照。
- 5) この頃河東碧梧桐らの新傾向俳句運動に共鳴し、大正 11 年に俳句雑誌『層雲』を

碧梧桐らと創刊した。しかし後に新傾向から自由律への展開を目指すようになり、碧梧桐らと分かれて自由律俳句のリーダーとなる。

- 6) 明治 33 年に与謝野鉄幹が創刊した浪漫主義短歌の雑誌。同じ時代に北原白秋や若山牧水らを輩出した。
- 7) 村上 (2006)、64 頁参照。
- 8) 種田山頭火 (1973)、51-52 頁参照。
- 9) 村上 (2006)、102 頁参照。
- 10) 種田山頭火 (1973)、6-7 頁参照。
- 11) 山頭火の家は浄土真宗であった。
- 12) 種田山頭火 (2011a)、8 頁参照。
- 13) 種田山頭火 (2011a)、260 頁参照。
- 14) 種田山頭火 (1973)、13 頁参照。
- 15) 種田山頭火 (2011a)、25 頁参照。
- 16) 越後長岡藩の下級武士であったと伝えられている。嘉永 5 年 (1852 年)、信濃伊那郡に忽然とやってきて、そこで浮浪生活を送った俳人。
- 17) 種田山頭火 (2011a)、122 頁参照。
- 18) 種田山頭火 (1973)、9 頁参照。
- 19) 種田山頭火 (2011b)、190 頁参照。
- 20) 種田山頭火 (2011c)、264 頁参照。
- 21) 種田山頭火 (1973)、366 頁参照。
- 22) 種田山頭火 (2011b)、365-366 頁参照。
- 23) 種田山頭火 (2011b)、8-11 頁参照。
- 24) 種田山頭火 (2011b)、11 頁参照。
- 25) 種田山頭火 (2011a)、8 頁参照。
- 26) 種田山頭火 (2011a)、25 頁参照。
- 27) 種田山頭火 (2011a)、206 頁参照。
- 28) 種田山頭火 (2011a)、210 頁参照。
- 29) 種田山頭火 (2011a)、278 頁参照。
- 30) 種田山頭火 (2011a)、279 頁参照。
- 31) 種田山頭火 (2011a)、281 頁参照。
- 32) 種田山頭火 (2011a)、287 頁参照。
- 33) 種田山頭火 (2011a)、354 頁参照。
- 34) 種田山頭火 (2011a)、355 頁参照。
- 35) 種田山頭火 (2011a)、360 頁参照。
- 36) 種田山頭火 (2011a)、371 頁参照。
- 37) 種田山頭火 (2011a)、375 頁参照。

38) 種田山頭火 (2011a)、379 頁参照。

39) 種田山頭火 (2011a)、389 頁参照。

## 引用文献

ウェンダー, P. H. (2002) 『成人期の ADHD 病理と治療』 福島章・延与和子訳、新曜社 (原著: Wender, P. H. *ATTENTION-DEFICIT HYPERACTIVITY DISORDER IN ADULTS* Paul Wender c/o Rosenstone/ Wender through The English Agency (Japan) Ltd, 1995)

熊崎博一 (2014) 「ADHD の治療戦略」『こころの科学特別号 DSM - 5 対応神経発達障害のすべて』 連合大学院小児発達学研究所・森則夫・杉山登志郎編、日本評論社、67-73 頁

高柳伸哉 (2014) 「成人の ADHD、その特徴」『こころの科学特別号 DSM - 5 対応神経発達障害のすべて』 連合大学院小児発達学研究所・森則夫・杉山登志郎編、日本評論社、80-84 頁

種田山頭火 (1973) 『定本山頭火全集』 第 7 巻、春陽堂書店

種田山頭火 (2011a) 『山頭火 句集』 山頭火文庫 1、村上護編、春陽堂書店

種田山頭火 (2011b) 『山頭火 行乞記』 山頭火文庫 2、村上護編、春陽堂書店

種田山頭火 (2011c) 『山頭火 期中日記』 山頭火文庫 3、村上護編、春陽堂書店

種田山頭火 (2011d) 『山頭火 一草庵日記・随筆』 山頭火文庫 4、村上護編、春陽堂書店

種田山頭火 (2011e) 『山頭火 評伝・アルバム』 山頭火文庫 5、村上護編、春陽堂書店

友田明美 (2014) 「ADHD の病態」『こころの科学特別号 DSM - 5 対応神経発達障害のすべて』 連合大学院小児発達学研究所・森則夫・杉山登志郎編、日本評論社、74-79 頁

ヘンダーソン, J. L. (1992) 『夢と神話の世界 通過儀礼の深層心理学的解明』 河合隼雄・浪花博訳、新泉社 (原著: Joseph, L. Henderson, *Thresholds of Initiation*, Wesleyan University Press, 1967.)

村上護 (2006) 『ミネルヴァ日本評伝選 山頭火』 ミネルヴァ書房

ラディン, P.、ケレーニイ, K.、ユング, C. G. (1974) 『トリックスター』 皆河宗一・高橋英夫・河合隼雄訳、晶文社 (原著: Radin, P., Kerényi, K., Jung, C. G., *THE TRICKSTER - A Study in American Indian Mythology*. Routledge & Kegan Paul, London, 1956 *DER GÖTTLISCHE SCHLM*. Rein-Verlag, Zürich, 1954)

# Santōka (山頭火): Expression of Life and Death Seen in Haiku

by Amane FUKUDA

Santoka Taneda (種田山頭火) was a haiku poet of the Taisho period and the early Showa period. After becoming a Buddhist priest, Santoka set out on journeys in which he wandered aimlessly and became a drunkard, which caused a great deal of trouble. In this study, from a psychological perspective, the underlying reasons that made him a wanderer and in what ways his wanderings influenced his haiku creations are investigated. This is done through examining his diary, letters, and haiku poetry to gain insight on his life.

Santoka's life was a never-ending repetition of wandering and resettlement. Such a state can easily be explained by him having the disposition of the Trickster. A person who has this disposition continues to vacillate between drifting and settling down and is swayed by his greed without having any moral or social values. However, for some reason, Santoka was accepted and sheltered by the people around him. Furthermore, his unique actions helped him create original haiku poems that only he could produce.

If one adopts the view that Santoka might have had a neurodevelopmental disorder such as Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder (ADHD), one can understand more clearly many aspects of his previously incomprehensible and repetitive life. He could have been tormented by this affliction but somehow continued to live in society. ADHD is believed to be something in which the pain of not having Henderson's (1995) puer aeternus (eternal youth) is considered the essence of life. Santoka may have experienced a great deal of anguish related to being unable to escape from this eternal regression. Subsequently, he expressed his anguish in haiku poetry.